

一昨年秋、かつての太平洋戦争の激戦地硫黄島を訪れる機会があった。返還直後の昭和44年に一度調査をした時以来15年ぶりだったが、この島の自然と人文の様相に大きな変化はみられなかった。噴気孔ふきんの地熱活動や新しい隆起汀線のしめす海岸地形の特色は、特異な火山島として以前から知られていた状態のままであり、自衛隊基地のある平坦地の殺風景な景観が、ギンネムやガジュマルなどの侵入種の植生で一そう荒涼たるものになっているのも想像どおりであった。元日本軍の壕内に、暑気と湿気の中で2カ月間たてこもったあげくに死んだ兵士の遺品が、まだ無造作に置かれたままになっていた。

昨年6月、硫黄島旧島民の帰島の可否を議するため開かれた小笠原諸島振興審議会で、硫黄島での住民の定住は不可能との結論が満場一致で採決され、政府への答申案となって旧島民の帰島への願望は絶ち切られた。昭和15年10月の硫黄島村(当時)の人口は184世帯1051人と記録されており、昭和19年3月に強制移住させられる直前には1200人位が住んでいたとみられている。最近(昭和55年の調べで)旧島民の生存者は伊豆大島、八丈島その他に散らばって約半数になったらしい。さらに今帰島を願っている人がその何割であるかは確認できないが、かつて私有地を持ち、さとうきび栽培に精を出していた人達の島への愛着は絶ち難いものがある。畑、山林、原野を合せて828ヘクタールの民有地があったと記録にあるが、現在それらの土地所有権登記はどうなっ

ているだろうか。

前述の審議会の定住不可との結論の理由は、火山活動の継続を第1とし、産業の成立条件が厳しいこと、および戦禍の後遺症を加えている。火山活動については、火山研究者による精細な調査報告に基づくもので尊重すべきであるが、この報告内容は誇大に評価されていないか。戦前までは居住者が生計をたてていたものであり、最近の火山活動がとくに顕著になりつつあるとみる証拠は薄いのではないかと、との疑問もある。一方、不発弾の処理が終っていないことや遺骨の蒐集さえすんでいないからとの理由は、今まで政府が何もしなかったその怠慢を追認せよというに等しいとする。帰島促進協議会の意見があることも聞いている。

一方では自衛隊基地が存続し、日本の最南端の防衛の要にもなっていると見られる限り、審議会の決定は大きな意味をもっていたと考えざるを得ない。さらに文末になって筆者自身の反省を告白しなければならない。実は筆者も小笠原振興審議会の一員で、満場一致(あえて政府方針の原案に)賛成した一人である。生来の口の重さにもよるが、審議会の席上で質問も出せなかった自分の弱さを感じている。一抹の不安(疑義)がある——それは自然科学の調査結果が政府施策に好都合な形に利用されたとしたら、この国ではゲオポリティクの現代版がまかり通ることになる。

リエージュの二つの教室

式正英

1972年にミュンヘンとウブサラに長くいて以来、1976年のIGCの折のヨーロッパ・ロシア訪問を除けば、1983年のベルギー訪問は私にとっては本当に久しぶりのヨーロッパであった。これではずみがついて昨夏(1984年)もフランスとスイスを回って来た。ベルギーはアフリカへ渡航する場合の通過点だが、折角のヨーロッパへの足がかりを無駄にするのも惜しく、ザイールの帰途リエージュを訪問することにした。

サベナ航空のDC10型機はケンシヤサから10時間ほど

の一飛びで、10月20日朝の5時にブリュッセル、サベナム空港に着く。サハラ沙漠は夜の漆黒にかくれたままだったが、ヨーロッパに安着してみると暗黒のアフリカ大陸から解放された実感がこみあげて来てさすがに嬉しい。アレキサンドル・ピール夫人のすすめで、リエージュへ直通のリムジンプスに乗る。日本を出る前に和田明子先生に教えていただいたミュージック沿いのホリデーインに宿をとる。同ホテルは高からず安からず、適当な設備で、何よりも英語が通じ易いので都合がよい。何し